

## 外国人のための日本語学習法 ー上級レベルでの内容中心の日本語教育の試みー

横溝 紳一郎

### 要 旨

2010 年秋の上級日本語授業において、「内容中心の外国語教育」の概念のもと、「上級日本語：外国人のための日本語学習法」を開講した。授業は留学生と日本人学生が混在する環境下で進められた。学期末に提出されたレポートの内容から、「授業で取り上げられた外国語学習法の多くが、学習者にとって、かなりの程度身近なものであったこと」「シャドーイングを是非試みてみたいという学習者が多いこと」など、興味深いデータが得られた。それとともに、「授業中のディスカッションの量と質の調整」「履修形式」に関して、改善策を講じる必要があることが明らかになった。

【キーワード】 上級日本語授業 内容中心 外国語学習法 Good Learners

### 1. はじめに

2009 年秋の佐賀大学日本語カリキュラムの全面改定以降、調査者は上級日本語の授業ならびにコーディネーターを担当している。上級学習者にとっては、「これより上」のレベルの日本語授業がなく、その結果、リピーターとして上級の授業を受け続ける学習者が出てくる。そのニーズに応えるべく、調査者が担当する上級の授業は、毎学期できるだけ異なる内容で行うことにしている。<sup>1</sup>2010 年秋学期に開講した「外国人のための日本語学習法 (J-603)」もそのひとつである。本稿は、その授業の実践報告である。

### 2. 理論的背景

#### 2.1 内容中心の日本語授業とは？

「外国人のための日本語学習法」を 1 学期を通しての上級日本語授業としてデザイン・運営する際に、理論的拠り所としたのが、「内容中心 (Content-based) の外国語教育」という考えである。「内容中心」<sup>2</sup>の基本理念について、塩川 (1995 : 296) は、以下のように述べている。

この教授法では、特定のテーマ（例えば環境問題）あるいは教科目（例えば心理学）が持つ内容＝情報・思想・知識が学習者に目標言語を使って教授される過程で、学習者が付随的に目標言語を学習する、ということがその理論の核心となっている。

内容重視の外国語教育の具体的指導法とその効果について、深澤（2009：117-118）は以下のように説明している。<sup>3</sup>

内容中心の指導法とは、content-based language teaching、あるいはtheme/topic-based language teachingなどと呼ばれ、テーマを中心にしたもので、英語科授業の中で最初から現在完了のような言語材料について教えるのではなく、たとえば世界の環境問題について学んでいくうちに、結果的に現在完了の用法を学ぶことを目標とするものである。つまり、主目的は、第2言語・外国語を用いて数学、理科、社会のような他教科の内容を理解・表現することであり、その過程で言語について自然な形で学ぶことは副次的な目標となる。…このような内容中心の英語科授業は、言語を言語学習以外の実際的な目標のために使うという意味で画期的である。特に、中・上級英語学習者にとっては、これまでの言語学習経験だけでなく、日常生活での知識や体験が生かされるため、内発的な動機付けを高めることにもつながるであろう。授業で使用している教科書題材との関連から、ある課の題材へのプレ・リーディングのための内容としても使えるほか、その課の題材内容を発展的に学習して、さらにそれらの内容をオーラル・プレゼンテーションやディベート、また賛成・反対意見の発表、ライティングにつなげたりすることもできる。

このように、内容中心の外国語教育では、外国語をツールとしてテーマや教科を学ぶことにより、特に中上級レベルの学習者の学習動機が高まることが期待されているのである。

## 2.2 内容中心の日本語授業を行う上での難しさ

ここで非常に重要なのが、「どんな内容を授業のトピックとして選択するか」という点である。深澤（2009：118）は、その難しさについて、こう述べている。

ただし、教師側にとっては、英語の指導だけでなく、他教科の内容にもある程度の理解

をもつことが求められるため、2つの教科の専門家になろうとすれば大きな負担となる。

この難しさに加えて、「学習者全員が満足できるようなトピックを、学習教材としてどう用意するか」という困難さも存在している。この点について、青木（2005：758）は、以下のように述べている。

（上級レベルでは）内容中心（content-based）の学習が中心となるため、学習者のニーズに合い、レベル的にも適当な話題・教材を選ぶことも大切である。

これらの難しさを克服するために、本研究では「日本語学習法」をトピックとして選択した。その理由は、①学習者全員にとって馴染みが深く、興味・関心も高いトピックであること、②調査者自身の専門が外国語教育学であり、学習方法について講義を行うために必要な知識・体験を有していること、である。以下、上記の理念に基づきデザイン・運営された「外国人のための日本語学習法」という授業について述べていく。

### 3. 授業のデザイン・運営

#### 3.1 「外国人のための日本語学習法」のシラバス

学期初めに、学生に配布したシラバスの内容は、以下のようなものであった。

##### 【目標】

日本語がうまくなるコツ、それは「学び方を学ぶ(learn how to learn)」ことに他なりません。この授業では、初級から上級までの、日本語の学び方について、様々な理論と実践方法を多角的に探っていきます。また、その方法を実際に体験することで、日本語能力の向上もめざします。

##### 【内容】

授業は、以下のような形で進める予定である。

- ① オリエンテーション
- ② 自分の日本語学習歴を振り返ってみよう。
- ③ 日本語の「達人」への道
- ④ もう手遅れなのだろうか…。
- ⑤ 日本語学習に関係しているもの
- ⑥ 学習計画の立て方
- ⑦ リスニングの学び方
- ⑧ リーディングの学び方
- ⑨ スピーキングの学び方

- ⑩ ライティングの学び方
- ⑪ ボキャブラリーの学び方
- ⑫ グラマーの学び方
- ⑬ 社会の中での学習法
- ⑭ 「達人」の学習法のポイント
- ⑮ まとめ

〔教科書〕

竹内理(2007)『「達人」の英語学習法：データが語る効果的な外国語学習法とは』草思社

〔評価〕

出席を含む授業態度(50%)、レポート(50%)による。欠席3回で、自動的に不可となる。遅刻・早退は、2回で欠席1回とみなす。

〔備考〕

学生数などにより授業内容、評価方法を変更することがあります。

## 4. 結果報告

「外国人のための日本語学習法」は、単位取得に直結しない授業であり、開講も初めてであったため、何人程度の学生が履修するか、受講生数が当初は心配であった。日本人学生へも参加を呼びかけた結果、留学生11名と日本人学生1名が第1回目の授業に集まった。学期が進むにしたがって、留学生は徐々に減り始め、最終的には10名（留学生9名と日本人学生1名）になった。最後まで参加した10名の受講生のうち8名（留学生7名と日本人学生1名）が、最終レポートを提出した。<sup>4</sup>レポートでは、「①自分が日本語を学んだ時に、実際に行ったことがある学習方法はどれだったか。その方法によって日本語がうまくなったと思うか／思わないか。それはなぜか。」「②自分が日本語を学んだ時に、知らなかった学習方法はどれだったか。その方法を使えば、日本語が今よりうまくなると思うか／思わないか。それはなぜか。」「③授業で学んだことは、これからの生活に役立つ／役立たないと思うか。それはなぜか。」「④授業の進め方や授業形態についての要望」「⑤その他の感想や意見や要望」について記述するよう指示が出された。以下、同レポートに記された内容に基づき分析していく。

### 4.1 自分が行ったことがある学習方法について

この質問に対しては、留学生全員が既に上級レベルの日本語学習者であるためか、「だいたい行ったことがある（ような気がする）」とまずは答えた上で、その方法について、過去または現在の実践について具体的に細かくふり返る、という回答パターンが多かった。

#### 留学生A

リスニングで私がやっているのは、いろいろなジャンルの素材を大量に聞くことだ。そのためにわざわざテレビを買った。毎日、テレビを見ながら、ご飯を食べる。寝る前も必ずテレビを見る。一日で一つ、二つの単語でも、一年続ければ、非常にたくさんの単語を勉強できると信じている。ある諺で言われているように、ちりも積もれば山となる。リスニングはやはり外国語を耳に慣れることだと思う。また、リーディング能力を向上させるために、私は多読をしている。実は、本を読むのは趣味の一つでもある。今、日本語のレベルを上げるために、語彙数を拡大するのが何よりも大事だと思う。これまで学んだことを振り返ってみると、文法は普通の生活には充分だと思う。だが、物によっては、日本語の呼び方が分からないことがある。たとえば、お銚子とか、盃とか。授業中の先生の話はほとんど分かるのだが、教室の外では、日本人の友達との会話でも地元の人との会話でも、語彙不足を強く感じている。この問題の克服には、やはり多読が一番いい方法かな。これによって、知識も広がるし、書くのも上手になれる。一石三鳥とは、このことだ。

#### 留学生B

私は中級になった後で、リーディングの能力を高めるために、教科書に書いてあったように、「多読」という方法を使いました。それによって、自分の日本語読解力もぐんと伸びたと思います。理由は以下の通りです。まず、たくさんの文章を読むと、自分のボキャブラリーも必ず増えてきます。私は、単語本のリストを使って単語を覚えるのはあまり好きではありません。文章を読んで、中に出てくる新しい単語をメモして覚えるのが、私のいつもの方法です。一度目に入っただけの単語はすぐ忘れてしまうかもしれませんが、何度も出てくると、その単語を気付かないうち覚えてしまいます。こういう時が一番嬉しいです。大学一年生から今までずっとこういう方法で勉強してきたので、自分の単語帳は何冊にもなりました。これらの単語帳は私の二級と一級の日本語能力試験の勉強にたいへん役に立ちました。そして、多読をすると、自分のライティングの力もついてくるような感じがしています。文章の中に、素晴らしい言い回しと表現があれば、私はそれをメモします。それが、次回に作文を書く時の参考になります。書くことはまねることであり、よい表現を借りてきて使うのは、作文能力の上達にはとても役に立つと思います。また、大量に読むことを通して外国語の発想や論理、談話の流れもわかります。当然ながら、読む対象として、自分が興味のあるものが一番いいです。また、読み方についてですが、日本語—中国語の訳読ではなく、日本語を日本語のまま理解するのは大事なことです。

#### 留学生C

私は大学に入ってから受験勉強を続けた。日本語にいっぱい時間をつかっても、なかなか上手になれなかった。今思うと、すごく悔しい。自分の学習方法には多くの問題があったにもかかわらず、この2年の間、ずっとそれに気付かなかった。ここでは、授業で学んだ方法を考えながら、私が日本語を勉強する時に、実際に行った学習方法について少し述べたいと思う。

##### リスニング

私は日本に来る前、リスニングが一番苦手だった。いろいろなタイプの日本のアニ

メやドラマはたくさん見たけど、全然役に立たなかった。確かに、日本のアニメやドラマを見ることがリスニングに役立つといわれることもあるが、私自身の経験から見れば、それには条件がある。ある程度の日本語の能力がないと、いくらドラマを見ても、ニュースを聞いても、効果がないと思う。中国での日本のドラマやアニメはいつも中国語の字幕が付いている。中国の学生がドラマを見る時、つい字幕ばかりを見て、主役が話している日本語を無視するようになってしまう。やはり母語を見ることは外国語を聞くことより楽だから。このような形では、アニメやドラマはただの遊びや楽しみになってしまい、勉強にならない。しかし、字幕なしでは、リスニングやボキャブラリーの能力が足りない学生にとって、主役が何を話しているのかが分からないから、ドラマやアニメを見たくなくなる。この場合も勉強にならないだろう

#### ボキャブラリー

私は英語を勉強する時、文脈化で英語の単語を覚えるけど、日本語を勉強する時は単語帳を利用することの方が多い。英語の文脈は日本語よりもっと見つけやすく、覚えやすいと思う。私は日本語も学ぶ時はいつも単語帳で単語を覚える。この方法だと、短時間で多くの単語を覚えることができるから、リーディングに非常に役に立つ。しかし、この方法には、デメリットもある。単語帳の単語は普通あまり使っていないものなので、よく復習しないと、覚えた単語をすぐ忘れてしまいかねない。最近は自分の方法を変えようと思っている。多くの本を読むことによって、単語を覚えた方がいいのかもしれない。

#### 留学生D

授業で取り上げられた学習方法のいくつかは、自分が日本語を学んだときに使ったものだと思う。それは、学習計画を立てること、ボキャブラリーの学び方、リーディングの学び方、スピーキングの学び方、ライティングの学び方、等である。これらの方法によって、確かに日本語がうまくなったと思う。その原因について具体的に考えてみると、学習計画がまず勉強の始めには非常に大切だと思う。計画の中で、自分に合っている学習方法をきちんと選ぶことができれば、その後の勉強を促進する効果がある。学習方法は目標、目的を設定すること、短い期間（例えばこれからの1、2週間）の中で勉強の時間割りを作ること、そして、もしうまく行かなかったら、柔軟に切り替えることなどが含まれる。ボキャブラリーとリーディング能力を高めるためには、たくさんの文章を読まなければならない。実際、ボキャブラリーとリーディングはお互いに深く関わっていると思う。文章を読めるようになるためにまず必要なことは、単語をマスターすることである。最初は単語量が少ないけれども、短い文章を毎日少しずつ進んでいくと、その文章の中で単語を覚えられただけではなく、その単語の使い方も分かってくる。そして徐々に、長い文章でも読めるようになる。スピーキングの学習方法という、最初は教科書のテープをざっと聞いて、発音して、それから、文ごとにリピーティングして、（その文のアクセントに気づき発音し）直す。毎朝、キャンパスで声を出して読む。その方法を行うことで、徐々に日本語のアクセント、ニュアンスが身についてきたと思う。ライティングの学び方は、やはり最初たくさんの文章を読んで、その中の優れた表現をメモして覚えておくことが大切である。それに、どんな場合にその表現が使えるかと

確認する必要もある。自分は文章を書くときに、その表現を借りきて、勇気を出して、文章に出た表現と違う新しい表現を作っていくのである。

留学生E

中国で、日本語を習っていたときに、いつも自習室で勉強していた。中国の自習室では声を出すわけには行かないので、私はいつも黙ったまま、ボキャブラリーを覚えていた。今から見ると、すごく効率が悪い方法だった。また、単語帳だけに頼ってボキャブラリーを勉強するのはよくないと思う。それよりも、読解練習のときに、文章に出ている生の単語を覚えたほうがいいと思う。

日本人学生のコメントは、以下の通りであった。

日本人学生

一時期、集中してやったことがあるのは、リーディングの音読と多読です。音読は中学生の頃の教科書を引っ張り出して、3回程繰り返しました。多読は、図書館に置いてある PENGUIN READERS というシリーズの洋書を1日1冊程読みました。音読は、基本的な文法が以前よりすぐ出てくるようになったかなという感じです。多読は、効果がよくわかりませんでした。PENGUIN READERS には対訳がないのできちんと読めているのかが分からなかったことや、時間を図っていなかったので読むスピードが上がっているのかどうか分からなかったこと、楽に読めるようになったという実感がなかなか湧かなかったことが理由です。リーディングでは、スラッシュで区切りながら前から意味を取っていけるようになった時が一番「読めるようになった！」と感じたような気がします。スピーキングでは、シャドーイングをしたことがありますが、きついつと感じてすぐ投げ出してしまい、効果を意識する段階まで続きませんでした。ライティングは、学習法というか、中学生の時、週に1回英語で日記を書いて ALT に添削してもらうのが大好きでした。段々と英文の量も増えていったし、辞書を引く回数も増えたので、あの時が一番英文を書けたのではないのかなと思っています。

## 4.2 自分が知らなかった学習方法について

留学生7名中4名が、シャドーイング／音読を挙げていた。

留学生B

特にはないですが、私にとってあまり使わなかったのは音読とシャドーイングです。この二つの方法を使えば、もっと日本語が上手になれると思います。なぜかという、丁寧に音読することが会話に役立つからです。文章を声に出して繰り返し読んでいくと日本語（もとの文は英語）の感覚が分かるようになって、ある達人も言っていました。特に、日常よく使う表現や基本的な構文を繰り返して声に出して覚えると、無意識に口が動いてくれるかもしれません。そうすると、自分の言いたいことを滑らかに相手に伝えることができるので、自分の自信もついて来るような感じがします。それから、シャドーイングという方法も中国の先生がよく私たちに勧めてくれるのですが、やはり根性不足で、ずっと実行していませんでした。シャドー

ングはとても難しい練習だと思います。聞くことだけでも難しいのですから、聞いてすぐに同じ言葉を言うのはもっと難しいです。ある言葉が分からなかったら、頭が一瞬混乱してしまって、あとの文もよく聞き取れなくなります。しかし、もし苦勞を覚悟して、シャドーイングをすれば、きっとリスニングもスピーキングも上手になれると思います。シャドーイングを通して、きれいな発音を身につけることができます。特に、NHK などの有名なラジオを毎日きちんと聞くことや発音を真似ることによって、きれいで正しい日本語を話せるようになれると思います。日本語を専門として学んでいる私たちにとって、これからぜひシャドーイングを練習する必要があると思います。

#### 留学生C

私にとって、この授業で習った一番新しい方法はシャドーイングとリピーティングだ。実は、シャドーイングについては以前、一度聞いたことがある。リスニングの先生が私たちにさせようとしたのだが、いろいろな原因で結局やめてしまった。最近私は、昔見たドラマを改めて見ている。今は字幕を見ずに、主役の話だけを聞いて、シャドーイングやリピーティングをやっている。そして、日本人の話し方に以前よりも注意するようになった。このままずっと続けられれば、きっとスピーキングにもリスニングにも役に立つと思う。私はシャドーイングをすることによって、日本語が今よりうまくなると思うので、シャドーイングをやり続けようと思っている。

#### 留学生D

日本語を学んだときに知らなかった学習方法は、①シャドーイング、②（スピーキングの学習法の中で）会話をつなぐためのコミュニケーション方略、③（ボキャブラリーの学習法の中で）単語の文脈化、音声化、身体化、ネットワーク化、リスト化+反復で覚えることである。これらの方法を使えば、きっと日本語が今よりうまくなると思う。特に一番目の学習方法、つまりシャドーイングは、耳から入ったインプットをそっくりまねて発話していくという方法である。特に長い文章になると、繰り返している端から新しいインプットがどんどん入ってくる。それは脳の情報処理能力への厳しい要求があるが、長期的に見て、脳の鍛錬と日本語らしい話し言葉の習得（発音、スピード）にととてもよいと思う。

#### 留学生E

「シャドーイング」は耳から入ったインプットをそっくり真似して発話していくという方法である。これは通訳の養成の方法である。私はそれに大きな興味を持っている。だから、せりふがやさしいアニメを探してみて、それをまねて、シャドーイングを練習していく。一つ困ったことは日本語のせりふが見つからないことである。自分の繰り返したせりふが正しいかどうか分からない。やさしい文なら大丈夫だが、早口で長い文を言う場合は、すこし難しい。練習していくことによって、この困難はだんだん解決していくだろう。

シャドーイングに関してであるが、「全く知らなかった」というよりも、「聞いたことはある／先生に勧められたことがある」けれども、「本格的に学習方法として取りいれて実施したことがない」という回答が留学生の反応に多かったことが、興味深い。他には、以下のような



コメントがみられた。

留学生A

私は少し前まで、外国語の学習方法に関して、すごく悩んでいた。そこで、これに関する本をたくさん読んでいた。だから、これらの学習方法は全部分かった。しかし、現実の勉強の中ではなかなか実現できない。長く続ける力が弱く、意志が緩んでしまうのが原因かもしれない。方法はいろいろあるけど、やはり個人によって効果が違ってくると思う。自分にとって、一番いい方法、一番効率的な方法をみつけて、そして、この方法を自分の習慣にするのが、外国語学習の近道だと思う。

留学生D

コミュニケーション方略についてであるが、日本語を学んだときに、意識したことはなかった。確かに、人とコミュニケーションするとき、どう対話を成立させたいかということが問題になる。会話を続けるためには、例えば、自分の得意な話題に誘導すること、話題を自ら提供することなどいろいろな方法があることを知った。単語の覚え方で一番面白いのは身体化である。今まで、実践したことはない。しかし、ある特定の単語がなかなか覚えられない場合に、動作をつけたら覚えやすくなることもあると思う。

留学生F

日本語を学んだときに、知らなかった学習方法は「毎日コツコツ」だけではなく、「一定期間ずっと」も必要であるということである。毎日の定期的な学習はもちろん、例えば「夏休みに一カ月」という集中的な方法も日本語に習熟するためには重要といえよう。もしその方法を続けて使えば、自分の日本語が今よりもっとうまくなるように思う。例えば、集中的にボキャブラリーを広げることなどによって、自分の潜在的な記憶力を発揮できることであろう。

日本人学生

へえ、と思ったのはリスニングの学習法で、最初は「深く・細かく」聞かなければならないということです。とにかく沢山聞けばいいと思っていたので、目からうろこでした。書き取り等で、一言一句逃さない聞き方をしておけば音も意味も両方定着するので、今度からはそのようにリスニングを学習しようと思いました。また、今までではなんとなく初めてなんとなく挫折していたので、達人たちの学習計画、は参考になりました。英語学習をとにかく「続ける」ためにもう一度、学習する「目的」を考えて計画的に学習を続けていきたいと思います。

#### 4.3 授業で学んだことは役に立つか

受講生全員が、「授業で学んだことは役に立つ」と述べていた。

留学生A

言うまでもないが、授業で学んだことはこれからの生活に役立つと思う。今は就職が厳しくなっているので、人より多くの外国語を習得していることは、就職先が広がり、チャンスも増えるという意味を持っている。きっと就職に有利になると思う。そう考えると、英語と日本語だけでは足りないかもしれない。これから、韓国語と

かスペイン語とかを勉強するつもりである。今度はぜひ授業で学んだ方法を利用する。効果があるかどうかを自分自身で試したい。

#### 留学生B

今学期の授業はとても私の日本語の勉強だけでなく、ほかの科目の勉強にも役に立つと思います。前にもこれらの学習方法を知っていましたが、具体的にどうやって進めていくかが分かっていなかったです。…達人の方法が私にヒントを与えてくれただけでなく、彼らの言葉や意志も私を励ましてくれました。「達人」であっても、ずっと一生懸命勉強し続けています。時々困難に遭っても、谷に落ちても、ずっと諦めずに頑張っています。私はもっと努力しなければならないと思います。そして、こういう精神は勉強にとつてだけでなく、私たちの生活にとつても、とても重要なことです。たとえ失敗しても、積極な態度でその原因を探せば、かえってためになります。

#### 留学生C

今学期この授業でたくさんの学習方法を学んだ。今後の生活に役に立つと思う。現代は、一生を通じて勉強することが求められている社会だ。新しい物事はいつも出てくるので、よく勉強しないと、すぐに淘汰されてしまう。学習方法を身につけることができれば、将来そばに先生がいなくても、自分の力で勉強できる。学生にとつて、学習方法を学ぶことは試験の答えを求めることよりずっと大切だと思う。いろいろな学習方法を体験して、その中から、自分に合うものを選ぶことができれば、これからの勉強はきっと今までより、ずっと効率的になると信じている。

#### 留学生D

授業で学んだことは、これからの生活に役立つと思う。いままでの日本語の学び方をふり返ると、不十分なところがいっぱいあった。この授業を受けて、以前の学び方を反省した。授業で学んだことをこれからの日本語の勉強に取り入れて、役立てていきたいと思っている。

#### 日本人学生

役立つと思います。『「達人」の英語学習法』は英語・日本語の学習は勿論のこと、様々な学習に対して応用が出来ると思います。例えば、第3章「達人に見る学習計画」と第5章「社会のなかでの学習法」は広く応用が出来る普遍性の大きいところです。学習を「継続」するための方法が凝縮されているので、行き詰った時には読み返して参考にしたいなと思います。

### 4.4 授業の進め方や授業形態についての要望

「学生同士のディスカッションの時間を減らして、教師からの講義の時間を増やしてほしい」という要望が、留学生1名から出された。

#### 留学生C

授業の進み方については、特に言いたいことはないと思う。ただひとつ、先生の意見や説明をする時間が長くなれば、もっといいかもしれないと思う。今は学生のディスカッションが中心で授業が進められているが、同じ国から来た学生同士だ

と、ディスカッションに参加したくない人も出てくる。そういう時は、どうしようもない。むりやり相手に話をされるわけにもいかない。せっかく先生が話すチャンスを作ってくれているのに、黙って時間を過ごしてしまうと、「もったいない」と私は思う（あくまでも個人的な感想ですが）。

#### 4.5 その他の感想や意見

留学生1名から、この授業は上級だけでなく、中級や中上級レベルの学生に開講すべきだという意見がみられた。

##### 留学生 A

一つ意見がある。中級と中上級の学生たちにも、このような授業を受けさせることである。留学生は、中級と中上級の段階で、一日でも早く上手になろうと、すごく悩みながら近道を探していると思う。この時期の学生さんにとって、先生の授業はきっと恵みの雨のように、困った人を助けることができると思う。

日本人学生からは、日本人学生も受けるべきだという意見が出された。

##### 日本人学生

学習の仕方について、私は手際が悪いのを自覚してはいるもののどう直せばよいのかが分からなかったので、今回学習の仕方を学ぶことが出来てよかったと思いました。役に立つ授業だと思うので、もっと日本人生徒も受けたらいいのにと思いました。

#### 4.6 結果のまとめ

わずか8名のレポートに基づく分析ではあるが、以上の結果は、次のようにまとめられるであろう。

- ・授業で取り上げられた日本語学習法の多くは、学習者にとってかなりの程度身近なものであった。
- ・シャドーイングに関しては、全く未知ではないものの、本格的に取り込んだことのない学習法であった。
- ・シャドーイングによって、スピーキングおよびリスニングの力を伸ばせる／伸ばしたいと考えている学習者が多い。
- ・授業で学んだことは、「これから役に立つ」と捉えられているが、「学生同士のディスカッションの時間を減らして、教師からの講義の時間を増やしてほしい」という意見がみ

られた。

- ・中級や中上級レベルの学生への開講の可能性、日本人学生との混在学習の可能性等の、「履修形式」について、改善の必要性がある。

授業のデザイナー及び実施者として、「授業中のディスカッションの量と質の調整」「履修形式の再考」に関する具体的改善策を講じた上で、次回の授業に臨みたいと思う。

## 5. おわりに

「内容中心」における「内容」をどう捉えるかについて、日本語教育の分野では、様々な議論のなかで「内容」そのものの概念が、広がりを見せている。本研究での取り組んだ「内容」は、内容中心の外国語教育が提唱され始めた頃の、いわば原点に返った感すらある。しかしながら、「学習者全員にとって馴染みが深く、興味・関心も高いトピックを選択すること」は、実はたやすいことではない。本研究での知見が、上級レベルの日本語教育に何かしらの貢献につながることを願っている。

## 注

- (1) 昨年度の試みについては、横溝（2010）を参照。
- (2) 岡崎（2002）や三井（2005）は、Content-based の訳語として「内容重視」を使用しているが、本稿では「内容中心」という訳語を統一して使用する。
- (3) 深澤の引用文献は元々、英語教師用に書かれたものなので、内容中心で教える外国語として「英語」を想定している。本稿は、教える言語として「日本語」を取り扱っているのであるが、引用文はそのままにしてある。
- (4) レポートを提出した留学生の国籍は、すべて中華人民共和国であった。

## 参考文献

- (1) 青木惣一（2005）「上級レベルの指導」『新版日本語教育事典：言語・言語教育研究の方法』大修館書店、758-759.
- (2) 岡崎眸（2002）「内容重視の日本語教育」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社、49-66.

- (3) 塩川春彦 (1995) 「Content-Based Approach (コンテンツ・アプローチ)」田崎清忠編『現代英語教授法総覧』大修館書店、296-304.
- (4) 深澤清治 (2009) 「求められる統合型の英語科授業構成」三浦省五・深澤清治編著『新しい学びを拓く英語科授業の理論と実践』ミネルヴァ書房、111-121.
- (5) 三井豊子 (2005) 「統合的指導法」『新版日本語教育事典：言語・言語教育研究の方法』大修館書店、749-750.
- (6) 横溝紳一郎 (2010) 「コミュニケーション・スキルの訓練プログラムを応用した上級日本語授業」『佐賀大学留学生センター紀要』第9号、50-63.

(佐賀大学留学生センター教授)